

氏名	中村 聡子
授与した学位	博士
専攻分野の名称	医学
学位授与番号	博甲第 3235 号
学位授与の日付	平成18年9月30日
学位授与の要件	医学研究科病理系病理学(二)専攻 (学位規則第4条第1項該当)
学位論文題目	Follicular lymphoma frequently originates in the salivary gland (濾胞性リンパ腫は唾液腺に高い頻度で発生する)
論文審査委員	教授 岩月 啓氏 教授 松川 昭博 助教授 岡野 光博

学位論文内容の要旨

我々は濾胞性リンパ腫(FL)6例(grade 1 5例、grade 2 1例)、粘膜関連リンパ組織リンパ腫(MALTリンパ腫)10例、びまん性大細胞型リンパ腫2例を含む唾液腺原発悪性リンパ腫27例の臨床病理学的所見を検討して、FLとMALTリンパ腫とを比較した。FLの年齢は24-73歳で平均49歳であり、MALTリンパ腫の平均64歳よりも有意に低かった。FLのうち顎下腺発生は4例であったが、MALTリンパ腫では19例中5例のみであった。FLの臨床病期はIE期が1例、IIE期が2例、残りはIII-IV期であったが、MALTリンパ腫は13例がIE期で5例がIIE期であった。自己免疫性疾患の合併はFLの症例にはみられなかったが、MALTリンパ腫では8例にみられた。今回我々は、唾液腺にFLが高い頻度で発生することを示し、発症年齢や発生部位、背景の自己免疫性疾患の相違によってFLとMALTリンパ腫が病的に異なる可能性を示唆した。

論文審査結果の要旨

本研究は、唾液腺原発リンパ腫症例27例(濾胞性リンパ腫:6例、MALTリンパ腫:19例、びまん性大細胞型リンパ腫:2例)のうち、とくに濾胞性リンパ腫について、MALTリンパ腫と比較しながら解析した研究である。MALTリンパ腫に比して、濾胞性リンパ腫症例は、やや若年にみられ、耳下腺(2例)よりも顎下腺(4例)に多く、1例だけに軽度の唾液腺炎をみた。腫瘍細胞はCD79a+ CD10+で、6例中5例がbcl-2陽性であった。濾胞性リンパ腫の6例中5例と、MALTリンパ腫の19例中10例でクローン性増殖(PCR法)が証明でき、bcl-2-IgH転座が6例中2例に検出された。まれな唾液腺原発リンパ腫における濾胞性リンパ腫の意義について重要な知見を得たものとして価値ある業績であると認める。

よって、本研究者は博士(医学)の学位を得る資格があると認める。